



# 囚われ

森万紀子

文藝春秋

# 囚われ

森万紀子

文藝春秋

囚われ／＼書下ろし 純文学長篇 奥付

一九八九年二月二十五日 第一刷

著者 森万紀子 もりまさこ

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三番地 郵便番号一〇二  
電話東京(〇三)二六五局二二二一

定価 一、五〇〇円

印刷 大日本印刷

製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Makiko Mori 1989

Printed in Japan

ISBN 4-16-310810-6

書下ろし  
純文学長篇

# 囚われ

森万紀子



# 1

多摩の奥地、K駅で下車して借家へ向う坂道にかかった時、茅秋<sup>ちあき</sup>は立ち止まった。

両側は栗、櫟、樺などからなる深い雑木林であるが、此処迄来ると、多摩川の源流に近い溪流の音は一段と高く聞こえてくる。

坂道の先は切り開かれた明るい平地の一区画で、一番奥に建つ茅秋の借家と数軒<sup>ひらや</sup>の平家が点在するだけで、再び生い茂る雑木林の中に分け入りながら、どこ迄も続いて行く。

茅秋は立ち止まったまま息を潜め耳を澄ました。

やはり今日も上空から木々の深部から枝と枝の合間から、自分を二年前の一九七七年五月二十七日の過去に戻す、強い磁力が全身を引いて来る。

錯覚ではない。

しかし、茅秋は、磁力の間から、今、訪れて来た広尾に住む、能面を打つ高瀬老人の言葉が洩れてくるのを聞いた。

「……長い年月、人々に変わらぬ感動を与えて来た能面の前では、一人一人の個性による創造など、意味がない事を知って欲しいと思う。伝統の中に己の創造を生かし伝統に新しい息吹を吹き

込める人はごく限られた人でね」

老人は茅秋の心の底を囁く表情になりながら話を続けた。

「あなたはまず、多くの人々に長年、感動を齎したものがなんであるか、能面の中から感じとって貰いたい。面に向って自然に、感動の涙が流れればいいのだが、なかなかそうはいかない。三十歳を過ぎたばかりの若いあなたは、とても涙など流れないでしょうね」

茅秋は頷いた。

老人の所に面を打ちに通い始めて今日で四ヶ月、四回目の訪問である。

いつもと部屋で座る場所が違っていたせいか北側の壁が見え、そこに掛けてある能面に茅秋は初めて気付いた。

「……先生のお作ですか」

頬がこけ金属の墳込みのない窪んだ目は、虚ろで死霊の悲惨さを漂わせていた。

「私の作ではない。この面は藤戸に用いる、『二十余り』。新宿の古道具屋で初心者打った面を買ったもの」

老人は「二十余り」の面を源平の昔、先陣争いで功を一人占めしようとした佐々木盛綱に殺された地元の若い漁夫の幽霊の面として、誰もが知っていると呼び加えた。

老人は六十九歳とは思えない艶のある端整な顔をハンカチで拭くと誰に語るでもなく、話を続けた。

「私はこういう面は打ったりはしない。年を取って来ると美しいものにしか関わりたくなくなってくるからだろうね。人生の持ち時間が一年一年少なくなっていくのが自分で意識されてくると、完成度の高いものにしか触れなくなってくる。その気持は年々強くなる一方で困るんだが、自分の時間を守るのにとっても気が短くなってしまふ」

茅秋は正座したまま聞いていた。

「あなたにはそういう年寄りの我儘を許して貰わなければ」

ふと、自分は帰りを促されている事に茅秋は初めて気付いた。

まだ到着してから一時間も経っていないが自分が訪れた時から、帰りを待たれていたのかも知れないと思うと、全身がこわばって行く。

檜の素材と幾本もの小刀とノミを箱に収め風呂敷に包むと、茅秋は急いで帰りの挨拶をした。  
「氣を付けてお帰りなさい」

老人の言葉だけが軋がって来た。

玄関の戸を開け、そして閉めても送りに出て来る足音はついに聞こえては来なかった。

あれから一時間五十分の後、こうして借家のある雑木林の坂道迄帰り着いたが、その間中、茅秋は自分が老人の残り少ない人生の持ち時間から、美意識から追い出された屈辱感に心を締めつけられていた。

さっきから息をつくたび、恥辱が甦り眼前が涙で潤んで見えない。

目を閉じたまま茅秋は坂道の途中に立ち続けた。

一年前、年下の真彦との約十三ヶ月の新宿でのアパート生活を切り上げて、茅秋は奥多摩の雑木林のこの借家に一人で引越して来た。

今、一年近く住んでみると、大家が安く譲ってくれるのなら、この家を無理をしても手に入れたいと思うのは、山霧が樹木の密生する山肌を包み、溪流が山間を走り出て白銀の流れとなってきたらめくこの地の幻夢の世界に魅せられたためである。

そして何よりも、大気の中に時々不意に、二年前の一九七七年五月二十七日の時空に向って開かれて行く、虚空の道が存在する気配が漂い、大気の奥から自分を手繰り寄せるからだと思う。

茅秋は坂の途中に立ち続ける事に疲れ、目を開け、再びゆっくり登りながら、両側の葉を落した木の枝が幾何学模様を描いている冬の空を仰いだ。

つぐみ、ひよどりの群れが枝々の空間を縫って飛んで行く。

昨年引越して来た時もやはりこの土地は冬の冷え渡った静かさの中に沈んでいた。

あれから約一年、長くそして短い日々だった。

だがこうして落葉を踏み、都心の広尾の老人の家から雑木林の借家へ帰り着くたび、自分の内的時間に還る気持が一ヶ月ごとに強くなり確かなものになってきていた。

借家の枝折戸を開けると二十数歩で玄関に着く小さな家にも、やはりここを流れた一年間の自分の時間がある。

……ただいま……

その時間の累積に向って茅秋は帰って来た自分を知らせた。

そして外出用のスーツを脱ぎながら、今日も高瀬老人が自分に触れてくるのを期待して新しい下着を身に付けて行った事を思い出す。

しかし老人の残り少ない人生の持ち時間からも、美意識からも外された今は、下着の白さは病衣の白さとなり屈辱に病んだ心を更に強く包んでくる。

茅秋のその鬱積した心は、家に辿り着いた今、坂下の溪流の音に混じりながら、一度に部屋に溢れ出た。

しかしその瞬間、茅秋は息を止めた。

やはり老人は忘れてはいない。

鬱積した心の果てに、思い出すたび恥辱に体が震える老人との記憶が息づく。  
確かに高瀬老人はあの事を忘れてはいない。

四ヶ月前の七月、茅秋は青梅線に沿って流音を頼りに多摩川の溪流を奥へ奥へと分け入って行った。

みたけ、鳩ノ巢の溪谷から氷川付近は、岩壁もそれを縫って走る溪流の白波も美しい。茅秋が溪流の一つのカーブを辿り終えた時、急に川幅が広がり視界は開け川面のきらめきがまぶしかった。

しかし聳える山塊と山塊の頂に霧がかかり、白い霧の奥から見え隠れする山肌から、しんしんと靈気が迫っていた。

茅秋は川面と山肌を眺めながら、良い川相を捜すために溪谷を岩伝いに向う側へ渡ろうとした。茅秋の釣は少女の頃、祖父の供で知ったもので、魚には関心がなく、糸に掛るとすぐ、川に還すため、クーラーも魚籠も要らない。

仕掛を整えた二組の竿を用意するだけで間に合う。

広大な自然の流れから一つの命を釣り上げ死に追いやるか、再び川に還して、もとの生に繋げてやるか一瞬、茅秋はとまどう。しかし結局、川の流れに還した瞬間、自分の手によって確かに一つの命を自然の生の水脈に繋げてやった手応えを得る。

そして命を繋げた自分の指先も、流れの水脈に接しながら、呼吸するたびに水脈から、自然の力強い生命力が自分の体に注ぎ込まれる錯覚がする。

夕暮れの川面は心地よかった。水面から岩肌から木々の茂みから山気が湧き出て募って行き、

周囲はその中に沈み鎮まり返っていた。

溪流の流動は、自然の不変の律動である事を、この土地を訪れるたびに茅秋は心に刻んできた。しかし茅秋がこの土地を訪ねるのは深山の風景に心を通わすためでも鮎を得るためでもなかった。

溪流と風の自然の律動に自分の体を晒し、内部を通過する震動に乳首から下腹部が震える時、轟きが贅す快感の交錯が体内を歛びの渦と化する。

あの深く静かに隅々迄冷えた歛びを開花させてくる律動の轟きを体の奥深くで受け止めるためだった。

長靴を穿いただけの茅秋は魚が群れている川の流心迄は進めず、岩間の流れに立ちながら轟く流音の流れを受け止めていた。

眼前の川面から垂直に聳える山の頂に沈もうとする落日は川面を朱色に燃え上がらせ、きらめきで目を射る残光から視線をそらした時、茅秋は不意に川の中程に、腰迄流れに浸り、流心に竿を差す人影を認めた。

太い首筋と広い肩幅の堂々とした体格は夕暮れに光る川波の中でどっしりした岩礁のように安定していた。

しかしその力強さと安定感にもかかわらず、老い先短い老人である事が茅秋にはすぐ分った。おそらく落日寸前の最後の生命力を燃え上がらせる夕日の虚ろな明るさが、老人の全身を支配していたからだと思う。

老人を包む寂寥感のある明るさを眺めていると、その僅かな前途が思われ、来年、この川に再び自分が立つ時、老人の姿はすでにこの世にないと思われた。

来年、自分一人無人の溪谷に今のこの光景を回想しながら立ち尽すであろう自分の姿を思いな

がら茅秋は大気から走り出る流音を全身で受け止めたまま、その人に見入っていた。

「……私を呼びましたか」

老人は不意に振り返ると言った。そして川面を分けながらゆっくり茅秋に近づき同じ事を尋ねた。

「……あなた私を呼びましたね」

「……………」

帽子の下から白髪が覗く艶のある素肌を見ながら茅秋は左右に首を振り、しかし自然、老人の気迫に吸い込まれるように迎合して言った。

「ひょっとしたら来年この川に立つ私がお呼びしたのかも知れないのです」

この世にいないであろう老人を呼び続ける自分の姿が再び浮ぶ。

水面は燃え上がる朱色から赤紫色に変わり、静かに濃紫色に包まれようとしていた。

「来年から呼ばれるのはきつと吉兆でしょう。私はいつも後ろから、自分の過ぎた日々から呼ばれている気がするんです」

老人の魚籠には十四、五匹の鮎がいた。

「吉兆とおっしゃるのなら鮎は川に戻してご自分の命を、生きかえった魚の命に繋げて、長命を保たれた方が……」

茅秋は話し続ける自分が不思議だった。

「川に戻すどころか、私は、これを生のまま食べますよ。時々自分から洩れる吐息が鮎の悲鳴となって体の中から溢れて来る気がする。そんな時、自分の奥深い記憶から誰かに助けを求めて呼ばれている錯覚がするのです」

茅秋は黙って夕闇が川裾からそそり立つ山の輪郭を溶かし始めているのを眺めながら、老人の

声を聞いていた。

その声はすぐ側から聞こえるにもかかわらず滔々と流れる自然の深層から決して到達出来ない律動に混じって伝わってくる気がしてならない。

「私はこの川に四十年間もシーズンのたびに來ているんですけどね。いつの間にか、深みの所在、流れの速さ、川底の様子や苔の付着した状態まですっかり覚えてしまったんです」

……四十年……

茅秋はそれが落鮎の時期迄の、一年の長さからすれば僅かな時間だったとしても、四十年間も老人の内部を川の轟きが通過して來た事を思い、銀色の流れが作った年輪が彼の体内にきらめいている気がした。

「そう、四十年ですよ。だから私はこの川の川守、渡し守を自負しているんです」

「いいお話ですね……」

茅秋は大自然の律動に竿を差しながら動きに乗り川を滑る感触を連想すると、自分の体に律動の轟きが咲かせる快感の渦が、再び甦ってくるのを感じ、熱い吐息をついた。

薄闇が降り一段と強くなった川音の轟きは岩間の水の中に立つ茅秋の乳首に震動を伝え性感が体の芯から一つ一つ花開いて行く。

その勢いが呼吸するたび全身に波打ち欲望が盛り上がり吐く息がやはり熱い。

突然、側で川音を通して老人の言葉が舞った。

「自分ではいくら川守と思っても、私ぐらいの年齢になると夕暮れの水中で釣はこたえますからね。それに川風というのは心の髪に冷氣を注ぎ込むから余計気が滅入らされてしまう。もう上がりましょう」

水面から足を抜き、水滴を払いながら、岩に立つ老人は茅秋が川から出るのを手伝うため、手

を差し出した。

その手を握った時、自分の掌が激しく燃えるのを熱い息と共に老人に感づかれたようで茅秋は身を固くした。

茅秋にとっては雑木林の借家へ一人引越して来て以来、何ヶ月ぶりかで触る力強い男性の手であり、手に触発されて長い間の渴きが一度に溢れ出てくる。

自制できないまま、彼女は老人の手を離さず、彼に体を預け強く迫っていた。そうしていたのが、ほんの一瞬だったか、長い間だったか解らない。

知らず知らず茅秋は老人の胸へ深く顔を埋めていた。

「……私にあなたを満足させて上げられるだけの若さがあればいいんだか……しかし若さは煩わしう」

醒めたはっきりした声に茅秋は自分の体位を立て直すと激しい後悔の中で、老人の手を離れた。ゆっくり姿勢を元に戻す老人の動きが茅秋の体には一度も触れず、すぐ帰り仕度の仕草に移った時、茅秋は自分が今、老人に期待した行為に深い負い目を感じた。

老人は察したらしかった。しかし何もなかったように茅秋の足元を懐中電灯で照らしながら溪谷の岩場からK駅に向う木の根と石の小路を歩き出した。

「私はK駅の近くの山菜の美味しい宿を足場に毎年、三ヶ月近く川を廻るんだけど、その宿で夕食と一緒に食べて車を呼んであげるからお帰りなさい」

老人が茅秋の住んでいる所を尋ねた後、車なら三十分もあれば着くと言いながら話を続けた。彼はこうした山間の深い翳りの靈氣が漲る山路を踏み分けて歩くのに、釣以上に心魅かれるという。

「山の靈氣に浸っていると何百年もの昔の息吹が大氣の層に潜んでいる気がするんですよ。稀に

土地の人々と出会うと、昔の時間の中で里人に出会ったと思えてくる。私は能が好きでしてね。

結局年取った今は一人、面を打つのが一番楽しい。こういう山間は自分の好きな謡曲のゆかりの土地を歩いている気にさせられるんでね。もちろん、自然の風景の中になんでも自分の好きな能の世界を感じたがる、そういう私の気質の上の話だが」

「でもこの辺は深山の連なる山間を思わせますね。何か山姥に呼び止められそうです」  
「そうそう」

老人の同意の返事を聞き、茅秋はさっきの溪流での負い目から少し立ち直れた。

「あの舞台になった所は越後の上路うみちうの山だね。境川の近くで市振りからでも入って行ける」

やがて山菜料理屋に着き、明るい電光の中で見ると、老人の欲望の抜け切った透明な重量感に気圧され、茅秋はさっきの溪谷での負い目が電光の下に晒される思いがし、正面から老人を見る事が出来なかった。

話のきっかけも次になす仕草も思いつかないまま、ただ言葉を掛けられるのを待ちながら無言で身を固くして座っていた。

「今の若い人であなたのように言葉数が少ない人も珍しい」

老人は運ばれて来た山菜料理を茅秋にすすめながら続けた。

老人はかつて自分の所へ能面を打ちに通っていた若い人達の賑やかさがうっとりとうしくなり、指導を断って、今は自分と同年の婦人と十代から出入りしている青年が一人、一ヶ月に一、二度の割合いで訪ねて来るだけだという。

「私はこちらの完全な自由を保つために礼は受け取らないんです。単なる楽しみでね。さっき言った『山姥』の面を打てるようになる迄には時間が掛るが、月一回ぐらいの間隔であなたもいらつしやいませんか。面は手で打つのも心で打つのもないと私は思う質でしてね。それは自分

の心の中にすっかり築いた美を目を通して、素材に真直ぐ目で打つのです。何百年も人々に美しいと感じさせる美の力を飼てとる目を通して心に育んだ美を再び目を通して狂いなく素材に打つのです」

ふと顔を上げると茅秋はさっきから自分を見つめていたらしい老人と視線が合った。しばらく沈黙が続いてから老人は言った。

「あなたはあまり私を見ない人だね。虚ろな目をしているけど、今、あなたは何を考えているのだろう」

茅秋は何も考えていないと言おうとして、老人を眺めた。

「でも、私の話はしっかり聞いているのでしょ」

頷くとさっきの溪流での自分の欲望と負い目が浮び、窮する思いで、ふと、自分が能面を打つとしたら、老人が言う、目で打つのも心で打つのもないと思った。

自分の体には際限ない性感を齎すあの溪流の快感の轟き、あの自然の律動で打ちたいと茅秋は思った。

言葉では伝えられないその考えを抱いて茅秋が顔を上げると、老人は茅秋を見返しながら何も言わずにただ、嗤っていた。

ふと茅秋は今の自分の面を打つ時の途方もない空想を見透かされた思いがし、座っている自分の体がぐんぐん後の壁へ退いて行く気がした。

あの日から高瀬老人を一ヶ月に一回の割合で訪ねて今回で四回目である。

老人は渓谷で茅秋が身を預けて迫った行為を忘れたかのように、一度もその事を言葉でも身振

りでも触れた事はなかった。

しかし今日のように彼の残り少ない人生の持ち時間から拒否され外された時、老人が自分のあの時の行為への蔑視を、そして自分自身への拒絶を、心の底に抱き續けて来た事が察せられる。

やはり老人は四ヶ月前の溪谷でのあの一刻を決して忘れてはいなかったのだ。

さっき広尾の家から帰宅した時よりも寂寥感は深く茅秋を打ち、部屋はすっかり暗くなったのに、まだ明りも点けていない。

こういう暗がりに篝火に映し出された男と女の情交の光景を茅秋はいつか見た事があると思つた。

しかし見たのではなく、常に自分の体の中に渦を巻いている欲望と共に脳裏に去来している妄想なのかも知れない。

真彦と別れて一年、茅秋の体には、くすぶる欲望が乾いた赤土の土塊のように体を覆っている。雑木林からこの部屋に届いてくる溪流の音が源流の自然の律動のように強く轟く日、その轟きは茅秋の体に震動し快感を開花させるが、目を閉じると更に欲情を募らせてくる幻想がある。

仏像の腹部から腿にかけての丸味であり、ゆったりと波打って来る柔らかな湖水の肌ざわりであり、夕暮れの路地へ消えて行った白人少年の肉感的な胸である。

いづれ茅秋は、あらゆる丸味の中から自分に快感のうねりを齎すであろういくつかを、一人の性の宴の常連として自分の脳裏に招待するであろう。

室内は相当暗くなったが、さっき帰宅して以来、桐箱に入った能面の素材は風呂敷に包まれたまま、外出時のスーツは鴨居の衣紋掛に吊されたまま、隙間風に揺れていた。

それらは外出先からこの家に入って来た時の、それ迄の気持の流れの切断面を見るようで茅秋はいつもそのままにしておく。